

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第39号 1998. 4. 10

発行
北海道ポーランド文化協会
〒060-0052
札幌市中央区南2東2
河合楽器製作所北海道支社
電話 011-231-8661
FAX 011-221-4936

—新しいポーランドとの新しいお付き合い—

バブル景気のポーランド

吉野悦雄

エア・マックスというスニーカーをご存じですか？中高生の間で大人気の運動靴です。底に、透明な空気層の窓がいくつあるかでお値段が違います。その最高級品をワルシャワの靴屋で見ました。全面エアのタイプで五九九ズロチ、二万二千円。日本では見たこともありません。

イヴ・サン・ローランならご存じでしょう。その直営店がワルシャワの新世界通りに開店しました。日本ではデパートの中のコーナーにありますが、直営店はまだ知りませんが、もしかしたら銀座あたりにもうあるのでしょうか。

たまごっちの本物が昨年十二月上旬に売り出されました。四五ズロチ、千八百円。ワルシャワの小学生のほとんどが、模造品の子犬タイプやペンギン・タイプなどのたまごっちを持っていきます。二個持っている子供もかなりいます。

今年一月と二月の新車登録台数は八万台です。この数字は欧州では

ドイツについて第二位で、フランスやイギリスを抜いています。テレビやビデオへの需要は一巡して、今は冷蔵庫・洗濯機・ガスレンジなどの白物家電の西側輸入品に人気が集まっています。スウェーデン製のアルミサッシ窓枠やバス・タブなどで内装をリニューアルするのもはやいです。

勤労者の平均月収は千二百ズロチ、四万四千円。昨年の賃金上昇は二五%、物価上昇率は一七%、実質の賃金上昇は八%です。浮かれる気持ちは良く分かります。

失業率は全国平均で一一%まで下落しました。ワルシャワの失業率は三・〇%。先月の日本の失業率は三・六%ですから、日本以上に人手不足です。

大変なバブル景気です。好景気で税収が増えたため、財政赤字は一挙に縮小しました。国外旅行も盛んです。先日、米軍戦闘機がイタリアでスキー・ゴンドラの綱を切って多くのスキー客が亡くなりましたが、その中にポーランド人の家族がいました。

一九六〇年代までの日本人のポーランドへの接し方は、音楽や映画や

社会のあり方を学ぼうとする謙虚な態度でした。ところが一九八〇年の連帯運動から援助とか支援という傾向が強くなりました。殿様気分の傲慢な態度でこれからのポーランドとお付き合いすると大きな摩擦が生じるでしょう。新しいポーランドとは新しいお付き合いの仕方を考えなければならぬでしょう。(北大教授)

ポーランド語

講習会のお知らせ

初めて習う方、継続の方を対象に日常会話・基礎文法の入門・初級コース。その他ポーランドの文化・現況など。

熊倉ハリーナ先生と高岡美保先生が担当されます。

【日時】五月十三日から

毎週水曜日

午後六時～八時

七月十五日まで(全十回)

【場所】北海道クリスチャンセンター

札幌市北区北七西五

(電話736・3388)

【会費と申し込み】

一万二千円(十回分)

初回会場にて申し受け

【お問い合わせ】

富山まで

(電話551・7698)

ポーランド美術散歩(1)

國田祐作

教会とマリア信仰

昨年の夏、三十度をこえる日中の暑さがようやくおさまる夕方、古都クラクフの中心にある聖マリア教会で聖母昇天を祝う八月十五日の特別ミサが行われていました。信者にまじって堂内に入ると、たくさんのローソクの灯のゆらめきの中で聖母マリアを讃える歌と祈りが続いています。その敬けんな祈りにポーランドの人々のマリア信仰の深さを強く感じたものです。



「黒い聖母」
(チェンストホヴァ、
ヤスナ・グラ修道院)

と親しみを感
じました。豊
かな自然の恵
みを与えてく
れ、守ってく
れる大地の母
神への古い信
仰をマリア信
仰に重ねたの
です。した
がって教会に
はマリアのイ
コン(聖像)

ポーランドがキリスト教を受け入れたのは九六六年、最初の国王ミェシコが統治している時代でした。以来ポーランドはカトリック文化圏の一員として西欧キリスト教文明と強い結びつきを持つようになります。しかし一般の農民の古くからの自然信仰、とくに太陽信仰は根強いものがあり、教会は農民のキリスト教化のために彼らの習俗をとり入れなければなりません。農民は父なる神よりも聖母マリアのほうにず

が多く飾られま
した。
マリアのイコ
ンで有名なのは
チェンストホ
ヴァの「黒い聖
母」です。ヤス
ナ・グラ修道院
にあるこのイコ
ンは一三三四
年、イスラエル

からここに運ばれたとされ、福音者聖ルカが描いたものという伝説があります。ポ文協のポーランド訪問団のみなさんはよくご存じでしょう。ポーランド民主化の「連帯」運動のシンボルになったことからマリア信仰がいまなおポーランド人の心を強く結びつけていることがわかります。

クラクフの聖マリア教会は十四世紀に建てられたゴシック様式の建築ですが、正面入口から中央奥の祭壇に向かう方向はちょうど西から東への方向と一致しています。それは東方すなわち太陽の昇る方向に神の座を設けることで農民の太陽信仰をキリスト教に結びつけるためでした。中央の木彫り祭壇は十五世紀後半にヴィド・ストヴォシという彫刻家の手になるもので、高さ13メートル、幅11メートル、中央部が左右



「聖マリア教会」
(14世紀、クラクフ)

に開かれる仕組みになっています。マリアとキリスト、聖人たちの諸像の生き生きとした木彫群が釘一本使わずに組み立てられている見事なものです。第二次大戦中、ナチ占領軍はこれをバラバラにしてニュルンベルグに奪い去り、戦後返還されて現状に修復されました。

聖マリア教会正面の高い塔から一時間ごとにトランペットが鳴り響いて観光客を楽しませますが、十三世紀モンゴル軍のクラクフ侵入の急を告げたラツパがそのはじまりと言われています。

ポーランドの農村の道すじに幼児イエスを抱いたマリア像がよく見られますが、その素朴な姿にわが子を慈しむ母の姿を重ねたのは人々の自然な感情だったのでしょう。

(北海学園大教授)

一八四〇年のシヨパンと時代精神

三浦 洋

今年、ポーランドの詩人アダム・ミツキエヴィチの生誕二百周年で、ポーランドでは大統領の呼びかけで「ミツキエヴィチ・イヤー」が企画されているそうです。その企画には、ノーベル賞を受賞した二人の詩人、チェスワフ・ミウオシユとヴィスワヴァ・シンボルスカが協力します。また、アンジェイ・ワイダは、ミツキエヴィチの代表作「パ



ジョルジュ・サンドが描いたシヨパンの肖像画（一八四一年頃）。シヨパンは、この絵を大変気に入っていた。

ン・タデウシ」を映画化する計画で、この夏には撮影を開始すると、ポーランドの雑誌「ポリティカ」二月七日号が伝えていきます。

一方、今年は「日本におけるフランス年」にもあたっていますから、私はフランスでの亡命ポーランド人たちの活動を考えてみたいと思っています。そうすれば来年のシヨパン没後百五十周年を迎えるための「予習」にもなるでしょう。

実は、私は以前から、一八四〇年のシヨパン（三十歳）にとくに興味を持ってきました。それは、シヨパンが書いた、次のような二通の面白い手紙があるからです。

一八四〇年五月二日付け、

ルドヴィク・プラーテル宛て

サンド女史は、彼女の戯曲の初演にあなたを招待するよう、私に言いつけております。ご連絡が遅れてすみません。座席表を見たところ、あなたのお隣はクロール・ベイ様です。

フリッツ・ベイ

一八四〇年五月三日付け、
コンスタンティ・ガシンスキ宛て
君に約束していましたがねーこれは、刊行されていない「スピリデオンの」原稿です。レイ氏は君の蔵書になることを引き受けました。後で、「ヴァーレンロット」も君に届くでしょう。お元気で
五月三日だ！

シヨパン

最初の手紙は、ポーランド人のルドヴィク・プラーテル（シヨパン研究者の佐藤允彦氏が「ルドヴィカ」と書いているのは誤り）に宛てた、ジョルジュ・サンドの戯曲「コジマ」の初演への招待状で、「クロー」というのは、フランス人の医師アントワーヌ・クロールのことです。この手紙の中で、「ベイ」という妙な言葉が二度使われていますが、これはトルコ語で「殿下・閣下」という意味です。なぜシヨパンはこのとき、トルコ語を使って言葉遊びをしたのでしょうか。

第二の手紙は次の日に書かれたもので、エクスという町にいたポーランド人の友人ガシンスキに三冊の本を送ることを知らせる手紙です。サンドの小説「スピリデオンの」と、ポーランドの昔の大文学者ミコワイ・レイの本と、ポーランドの当時

の大詩人アダム・ミツキエヴィチの「コンラート・ヴァーレンロット」の三冊です。そして、最後にシヨパンは、「五月三日だ！」と書いていますが、これは、分割される前のポーランドで一七九一年五月三日に採択された民主的な憲法の記念日を指しています（偶然にも、日本の憲法記念日と同じです）。「五月三日憲法の精神を守ろう」というのは、「ポーランドを復活させよう」という独立回復運動に通じるスローガンだったので、こんなふうにはシヨパンが政治運動のことを書くのは、大変珍しいことです。

さらに、これらの手紙が書かれた一八四〇年には、もう一つ不思議なことがあります。それは、シヨパンとサンドが、この年に限って、ノアンに行かなかったことです。二人は九年間（一八三八〜四七年の足かけ十年）一緒に暮らしましたが、一年の半分（だいたい六月から十一月まで）はフランス中央部の田舎、ノアンで過ごすのが習慣でした。そこにサンドが祖母から譲り受けた屋敷があったからです。しかし、一八四〇年だけは例外的に、ずっとパリにいました。これは、なぜだったのでしょうか。

整理すると、私が一八四〇年の

シヨパンに抱いた三つの疑問は、

①トルコ語「ベイ」を使ったのはなぜか

②「五月三日だ！」と書いたのはなぜか

③ノアンに行かなかったのはなぜか

ということですが、私はつい最近になって、これら三つの疑問への答が一つの焦点を結ぶことに気づきました。それは、亡命ポーランド人たちの政治運動と時代精神です。イエジー・スコプロネクというポーランドの歴史学者が書いた「ランベール館のバルカン政策」という論文のおかげで、私の考えがまとまりました。この論文をポーランドで探して頂いた、北大留学生のマジェーナ・ティムチョフさんに、この場を借りてお礼申し上げます。

本稿では、冒頭の二つの手紙を窓にして、当時の政治運動とシヨパン、サンドの関係をのぞいてみたいと思います。

チャルトリスキとシヨパン

シヨパンを含め亡命ポーランド人のことを考えるには、まず、歴史的経緯を見ておかなければなりません。

先ほど書いた「五月三日憲法」採択から四年後の一七九五年、主権国

家としてのポーランドは滅亡しました。ロシア、プロイセン、オーストリアという周辺の三帝国によって分割され尽くしたからです。その後、シヨパンが生まれた一八一〇年頃には、ナポレオンによって支配され（ワルシャワ公国）、さらに、シヨパンの幼少期には、ウィーン会議が作り出した「会議ポーランド」になりました。これはロシアが支配する国だったので、〈神童〉シヨパンは、ロシア皇帝アレクサンドル一世が来たとき御前演奏しました。しかし、



アダム・イエジー・チャルトリスキ
(一七七〇～一八六一)

次の皇帝ニコライ一世が来たときには歓迎の演奏会に加わりませんでした。一八二五年にロシアで起こったデカブリストの乱に連座して、ポーランド人の革命運動家が虐殺された

ことを、思春期のシヨパンは知っていたからです。

やがて一八三〇年、フランス七月革命の波及で、ポーランドの十一月蜂起（「ワルシャワ革命」とも呼ばれる）が起こりました。そのときのリーダーがアダム・イエジー・チャルトリスキです。蜂起は一時的に成功しましたが、翌年九月、ロシア軍によって鎮圧され、たくさんのポーランド人が亡命することになりました。シヨパンは蜂起の少し前にポーランドを出国しており、蜂起の失敗をドイツのシュトゥットガルトで知りました。このときシヨパンがロシアを憎んで、「神よ、あなたはモスクワ人なのですか！」と書きつけた手記は大変有名です。ちなみに、このときのシヨパンのパスポートは、ロシア政府が発行したものです。彼がフランス市民権をとったのは、一八三七年になってからです。

シヨパンは一八三一年九月からパリで暮らし始めましたが、しばらくして、続々と亡命ポーランド人たちがパリにやってきました。チャルトリスキたちが到着したのは一八三三年でした。一八三四年頃からは、チャルトリスキの妻アンナが、セーヌ川に浮かぶサン・ルイ島のランベール館で、ポーランド難民のため

のチャリティー・バザーを開くようになりました。シヨパンもこのバザーで必ず買物をして、募金に協力しました。アンナはポーランドの名家の一つ、サピエハ家の出身ですが、サピエハ家は代々フランスとの結びつきが強かったので、有力者の後ろだてでバザーを開催できたのでしよう。ちなみに、かつてポーランドのサピエハ家では、シヨパンの父ミコワイ（フランス名・ニコラ）がフランス語を教えたことがありません。実は、ナポレオンの妻の一人とヴァレフスカも、ミコワイからフランス語を習いました。

ランベール館の所有者はザッフというセルビア系モラヴィア人で、その息子フランチシェクは、プラハ大学法学部を卒業後、十一月蜂起に義勇兵として参加した人でした。フランチシェクは、チャルトリスキの片腕となりました。一八四三年になって、チャルトリスキはザッフからランベール館（オテル・ランベール）を正式に獲得し、ここに居を構えました。チャルトリスキを支持する人々が「オテル・ランベール派」と呼ばれるゆえんです。亡命ポーランド人は、政治路線の違ういくつかのグループに分かれていましたが、



マリア・ヴァレフスカ
(1789~1818)

「オテル・ラベール派」は有力な保守的グループでした。ランベール館の一室に飾られていたと考えられるレオナルド・ダ・ヴィンチの絵については、國田祐作先生の御研究が「ポーレ」第24号（一九九三年発行）に掲載されています。

シヨパンは政治活動家ではありませんでしたが、音楽を通じてチャルトリスキと親しく交際しました。とくに、チャルトリスキの姪にあたるマルツェリーナは、ポーランドの名門、ラジヴィウ家の出身で、シヨパンにピアノを習いました。ラジヴィウ家総帥のアントニはプロイセンの王女を妻にし、ポズナニ（ドイツ語で「ポーゼン」）地方を治める殿様のような人でした。大変な音楽好きだったので、昔からシヨパンを可愛がっていました。シヨパンの方はアントニにピアノ三重奏曲を献呈しました。ラジヴィウはベートーヴェンやメンデルスゾーンと親しかったので、シヨパンはドイツの音楽家のことを聞いて知っていたと思われま

ランベール館のバルカン政策

さて、シヨパンとチャルトリスキの関係を簡単に説明しましたが、ようやく手紙のトルコ語の謎に近づくことができます。

チャルトリスキは、ポーランドを再び復活させるために、パリでいくつかの計画を練り、国際情勢に応じて作戦を変えました。もともと、ロシアのアレクサンドル一世の下で外務大臣をつとめ、ウィーン会議に出席した経験を持っていたので、国際情勢に敏感だったのです。彼の基本方針になっていたのは、様々な帝国に支配されているスラブ人が連携して、革命を起こすことでした。とくに、当時トルコに支配されていたバルカン半島に住む南スラブ人（セルビア人やブルガリア人など）の民族運動に共感したチャルトリスキは、陰でセルビア人たちと連絡をとりながら、トルコ政府と交渉しました。これが、「ランベール館のバルカン政策」と言われるものです。もしトルコという国が存続するならば、トルコ内にスラブ人の自治連邦を作る構想を進め、もしトルコが戦争の敗北で崩壊するこ

ポーランドの国始伝説

昔むかし、スラブの地がまだ原始林に覆われていた頃、三人の兄弟がいた。レフとチェフとルスである。ルスは広い草原を求めて東方へ、チェフは商売の道を求めて南方へ向かったが、レフはこの森を開拓しようと思った。とある林間に湖のある平地、真ん中に柏の巨木、そして真っ赤な夕空に大きな白鷺が悠然と舞っていた。

なんと素晴らしい処だ！

ここがすっかり気に入り、仲間と住み着き、開拓を進めた。この土地はグニエズノ（鷺の巢の意、現在ポズナンの近くにある。白鷺はポーランドの象徴）、彼らはポラーニエ（平原の住民の意）と呼ばれるようになった。レフの子孫

はピアスト王朝を創り、末裔ミエシコー一世はキリスト教を受け入れ（996年）ここにポーランドの歴史は始まった。

・・・なお、東へ旅したルスはロシアを、南へ行ったチェフはチェコを拓いた。そして今再び、連帯のリーダーとしてレフ（レフ・ワレサ大統領）が現れた！

[備考]

Barbara O/DRISCOLL著・ポーランドの歴史より。

国名ポルスカ（ポーランド）や民族名ポラーニエの由来。

996年・日本は平安時代、小野道風没し、藤原道長生まれる。

（富山 信夫）

す、という作戦でした。当時、トルコはエジプト（トルコに支配されていた）と二度の戦争をしましたが、ヨーロッパの国のうち、フランスだけがエジプトに味方し、イギリスなど有力国がトルコを保護しました。かけひきの結果、最終的にイギリスおよびトルコ側が勝った形になりました。フランスは孤立し、東方政策の責任をとって閣僚が交替しました。一八四〇年のことです。

もう、お気づきだと思いますが、冒頭のシヨパンの手紙が書かれた一八四〇年五月は、トルコの話題で持ち切りの時期だったのです。しかも、手紙の相手のルドヴィク・プラーテルはチャルトリスキの参謀の一人で、トルコ問題について意見を交換する間柄だったのです。その証拠に、この二人が交わした手紙が残っています。また、手紙に出てく



アダム・ミツキエヴィチ
(一七九八〜一八五五)



ジョルジュ・サンド
(1804~1876)

るクロイ医師は、史料によれば、エジプトに滞在していたことがあり、フランスとエジプトとの結託に関わった人物と想像されます。ですから、この手紙を書くにあたってシヨパンがトルコとエジプトを意識し、トルコ語の言葉遊びをしたのは、以上のような時代背景があったからだと考えられるのです。

当意即妙に「クロー・ベイ」としゃれを書き、自分のサインを「フリッツ（フリデリクの略）・ベイ」と認めるエスプリは、いかにもシヨパンらしいと言えます。まるで音楽のように、彼は言葉を転調させています。フランス語からトルコ語への転調は、へ短調から唐突な口長調へ、あるいは、異名同音による嬰ハ短調から変イ長調への転調だったのでしょうか。一つの手紙に平気で二

〜五か国語を使うシヨパンには、言語にも調性感があったにちがいないありません。また、サンドのことも忘れてはいけません。サンドがプラーテルやクロイを芝居に招待したことは、彼女自身がチャルトリスキ陣営の人脈に通じていたことを示しています。

私はかつて漠然と、バイロンをはじめ当時のロマン派はギリシャとトルコの対立を意識していたから、シヨパンがトルコ語で冗談を言うこともあったのだろう、と思っていました。しかし、実際には、ランベール館のバルカン政策に関わっていたのです。これで、①トルコ語の謎は解けました。

(つづく)

今年の活動について

去る一月十四日と三月九日の2回にわたって本協会の運営委員会が開かれ、本年度の活動の具体的な内容について討議した結果、次のような内容で行うことにきまりました。

会誌「ポーレ」の充実

本年度の総会で了承された基本方針に従い、発行を年4回から年3回に減らす一方、わが国におけるポーランド交流組織を代表する組織にふさわしい充実した内容にすることにしました。

具体的にはポーランドの政治・経済、文学・歴史、美術、音楽、舞台芸術などに専門的な知識を持つ方々に定期的に執筆を依頼することになりました。本号は、その最初の例になります。（責任者：「ポーレ」編集委員）

ポーランド料理の会と

チャリティーバザーの開催
好評のポーランド料理の会を今年も熊倉ハリナさんを中心に開催することになりました。それと同時に、クラコフの日本美術セン

ター支援のためのチャリティーバザーを開きたいという提案があり、承認されました。バザーは例会など機会あるたびに開かれることとなります(本誌の記事参照)。

なお、すでに会員の國田氏から自筆の絵はがきを、団体会員の河合楽器(株)から楽器を提供したいという申し出がありました。(料理講習会の責任者: 斎田道子、佐々木保子、バザーの責任者: 國田祐作、小林暁子)

映画の上映会

九月下旬ごろを目指して、ポーランド映画の名作のビデオ化されたものを鑑賞する会を開く方向で検討することになりました。

前回はかてる2・7の視聴覚室で「コルチャック先生」の上映があり、好評でした。(責任者: 霜田千代麿、本間富雄氏にも協力を依頼)

総会および例会

本年十月十七日に三浦洋氏の「ショパン」についてのお話の最終回(第三回)を例会

として行い、引き続き総会と恒例の懇親会を行うことになりました。(責任者: 小笠原正明、高岡美保)

その他

五月二十一日に札幌コンサートホール Kitara で開かれるカジミエツシュ・ギェルジョード氏のピアノリサイタル、および六月十八日に同じく Kitara で開かれる遠藤郁子(ピアノ)とマリア・ポミアノフスカ(スカ・フィドル)の演奏会については、共催に近い形でできる限りの後援を行うことになりました。

なお、本年度の総会で議論された市民参加の「ポーランドの夕べ」は、内容が煮詰まらないため、引き続き検討することになりました。できれば来年度(本年十一月以降)に実施したいという方針が出されています。楽しい集いとするための案を責任者にお寄せ下さい。(責任者: 市川恒樹、小笠原正明、富山信夫)

西野コンサート15周年記念 [第2弾]

98年5月21日(木) 8:15PM開演 8:30PM 始演
札幌コンサートホール Kitara

入場料 3,000円(西野コン会員 2,700円)

Program F, ショパン

- ◆ポロネーズ
第9番 変ロ長調 作品71-2
- ◆幻想即興曲
嬰ハ短調 作品66
- ◆ノクターン
第7番 嬰ハ短調 作品27-1
第8番 変ニ長調 作品27-2
- ◆バラード
第1番 ト短調 作品23

- ◆マズルカ
第47番 イ短調 作品68-2
第27番 ホ短調 作品41-2
第41番 嬰ハ短調 作品63-3
第30番 ト長調 作品50-1
第31番 変イ長調 作品50-2
第32番 嬰ハ短調 作品50-3
- ◆ワルツ
第6番(小犬) 変ニ長調 作品64-1
第7番 嬰ハ短調 作品64-2
- ◆ポロネーズ
第6番 変イ長調(英雄) 作品53

日本ショパン協会北海道支部第91回例会 “ショパン・そのポーランドの心”

遠藤 郁子とマリア・ポミアノフスカ

(ピアノ)

(スカ・フィドルひき語り)

1998年6月18日(木) 6:30PM 開演

札幌コンサートホール Kitara



ホレアポロニカ

16~7世紀のポーランド民謡

ショパン

マズルカ Op. 68-2, Op. 56-2, Op. 33-2

ルトスワフスキ
牧歌集より

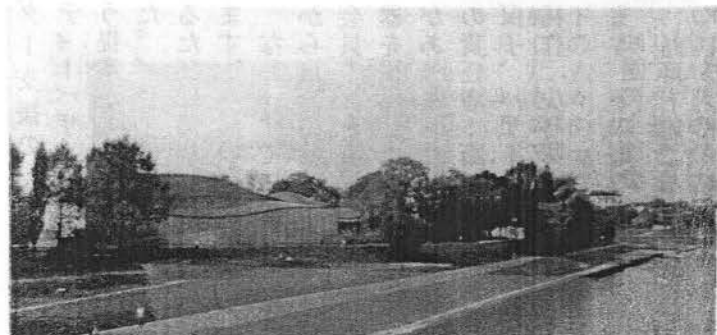


バザーにご協力を

今年度の活動予定の中でも触れましたが、バザーについてももう少し詳しくお知らせします。

昨年秋季ポーランド訪問団は、クラクフの日本美術センターを訪ねました。(関連の記事はポーレ25・28号をご覧ください。)

ヴィスワ川に面した景色の美しい場所に建てられた立派なセンターで素晴らしい日



本美術のコレクションを見ることができたのは大きな感激でした。けれどもこのセンターは、財政難のため運営に支障をきたしており、学芸員も置けなくなりましたことを知りました。

ポーランドの人々が日本の美術品のために建物を建てて大切に保

存して下さっているのに、日本人が何もしないで良いわけはない。何かお役に立てることはないものかと話し合った結果、北海道ポーランド文化協会としてバザーを催し、それで得た収益をたとえ少額でもセンターに継続的に寄付をしてはどうかということになりました。

そこで今年度はまず手始めに例会のたびに会場の一隅でバザーを開くことを計画しました。そのため会員の皆様には次のことで協力をお願いしたいのです。

- (1) お使いにならない品物の寄付—ご家庭にある贈答品(タオル・石鹸・保存のきく食料品・食器など) スカーフ・マフラーなどの小物・ポーランドのお土産・画集・絵本・写真集など。その他。
- (2) バザーに参加して買っていただくこと。
- (3) 売り子としてお手伝いいただくこと。

なお、ご寄付の品物を受け取りストックしておく場所として次の三名の家を決めました。お問い合わせその他は下記へお願いします。第一回のバザーは六月を予定しています。

最近のポーランドの物価

ポーランドの新聞「ポリティカ」によれば十二月末ワルシャワの物価は、対前年比十六%アップ(41品目平均)、なお月収は二十七%アップになっています。(富山)

品物	市価	月収で購入できる量			
		1997 円*	1997 円[9]	1996 円	1995~93 円
パン	kg	81	530	418	500
牛乳	l	39	1,110	919	864
バター	250g	85	507	438	398
カテチーズ	kg	481	90	83	78
砂糖	kg	65	666	418	436
牛肉骨付	kg	333	129	102	95
馬鈴薯	kg	30	1,457	2,626	1,439
リンゴ	kg	56	777	707	578
オレンジ	kg	118	364	287	260
ウオッカ	0.5l	574	75	69	66
コーヒー	100g	63	686	511	430
チョコレート	100g	59	729	656	468
マクドナルド	食	178	243	174	169
マクビック	食	110	39	37	38
婦人美容室	回	20,350	2.1	1.8	2.1
紳士背広	着	44,400	1.0	0.7	0.5
冷蔵庫(280l)	台	40,700	1.1	1.0	0.7
カテレ(21型)	台	370	116	115	121
映画	枚	1,200	36	36	32
CDワード	枚	26~52	2,500	1,380	1,490
市営交通	回				

[註] POLITYKA (1998. 1. 10号)より

円換算* 1 zł=37円として (97年末 3.54zł=1円=130円)

- 佐々木保子 (814・9981)
 - 小林 暁子 (831・8570)
 - 斎田 道子 (621・1738)
- よろしくご協力をお願いします。

「ポーレ」編集委員会
小笠原正明・斎田道子
佐々木保子・安田誠子
(連絡先) 621・1783
(斎田)

POLE 第 39 号(1998.4.10) 目次

吉野悦雄「バブル景気のポーランド～新しいポーランドとの新しいお付き合い」、第 25 期ポーランド語講習会(1998.5.13～7.15)のお知らせ	1
國田祐作「ポーランド美術散歩(1) 教会とマリア信仰」	2
三浦洋「1840 年のショパンと時代精神(1)」	3
富山信夫「ポーランドの国始伝説」	5
今後の活動について	6
カジミェシ・ギェルジョート演奏会(1998.5.21)、遠藤郁子とマリア・ポミャノフスカ演奏会(1998.6.18)のお知らせ	7
バザーにご協力を、最近のポーランドの物価(「ポリティカ」誌より)	8